

# 「オリンピック×学生＝レボリューション」

コミュニティ福祉学部教授 沼澤 秀雄

## はじめに

本学はRIKKYO VISION 2024のLive Active～アクティブな生活を目指そう～で「東京オリンピック・パラリンピックの推進」を提唱した。そのなかで、「東京オリンピック・パラリンピックの開催を契機に、多様な人々との文化的交流、心と身体の健康、活力を持って生きる環境を提供するさまざまな教育・研究活動（立教スポーツの活性化、通訳・ボランティア派遣等大会支援活動、しょうがい者スポーツボランティア育成、競技への科学的サポート等）を実施します。」と具体的な内容についても記されている。また、本学は2014年6月23日に東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会と連携協定を締結し、2020年の大会に向けて、オリンピック・パラリンピック教育の推進やグローバル人材の育成、大学の特色を活かした取り組みを進めていくことになった。この活動はこれまでのオリンピック・パラリンピック運動で力を入れてこなかった大学からムーブメントをつくっていかうという組織委員会の試みで、大会に向けて以下のようなことが期待されている。

1. 地元小中高等学校へのオリンピック・パラリンピック教育の支援
  - ・一校一国運動などへの支援
2. 各種ボランティアの養成
  - ・観光おもてなし、しょうがい者支援等
3. 文化プログラムの担い手
  - ・地域の歴史文化及び若者文化の発信
4. 事前キャンプへの協力
  - ・大学施設の提供及び運営（通訳、競技等）への支援
5. 大会機運の醸成
  - ・学園祭等における大会PRイベントの開催

これらは2020年大会後もレガシーとして残るように地域や自治体等と連携し、実施していくとしているが、このような活動は、本学のビジョン2024の理念でも謳っている「東京オリンピック・パラリンピックの開催を契機に、多様な人々との交流を展開するとともに、心と身体の健康と生きる活力を与えられる教育・研究活動を拡大します」

を体現するものになっている。これまでのオリンピック関連科目は全学共通カリキュラムのなかで、現在のコラボレーション科目にあたる複数人数の講師が一つのテーマを様々な形態で展開する授業において、2010年から設置してきた。学際的なテーマにそれぞれの専門性を持った複数の講師によって迫っていくという考え方と、オリンピック・パラリンピックというグローバルなメガイベントについて様々な角度から迫ってみたいという思いが一致したことがオリンピック関連科目を作った理由であった。それを実現させるきっかけをつくってくださったのが日本オリンピックアカデミー理事である筑波大学の嵯峨寿先生である。オリンピック委員会の関係者、オリンピック研究・教育の第一人者を授業に招くことができ、以下のような内容で実施してきた。「オリンピックをめぐる心象風景」(2010)では、本学にも在籍していた元国際オリンピック委員会副会長の猪谷千春氏、日本オリンピックアカデミー会長で元国立スポーツ科学センター長の笠原一也氏、外務省外交官で元ギリシャ大使の望月敏夫氏をゲスト・スピーカーとして招聘し国際オリンピック委員会の実情や2016年の招致活動について話していただいた。「オリンピック・インパクト」(2012)では、元NHK解説委員の西田善夫氏やオリンピック研究者の中京大学の来田享子先生、首都大学東京の舩本直文先生、フェリス女子大学の和田浩一先生にご登壇いただき、近代オリンピックが現代にどのような影響を与えたかについて考えた。「2020年東京オリンピック招致のゆくえ」(2013)では、東京オリンピック・パラリンピック開催の意義や是非について、オリンピック評論家の伊藤公氏に話していただいた。また、アフロ代表取締役でカメラマンでもある青木紘二氏にオリンピックの写真を見ながらオリンピック(スポーツ)の魅力を語っていただいた。「オリンピックのレガシー」(2014)では1964年東京オリンピックで使用された競技施設の幾つかを訪ね、当時の日本人がオリンピックに抱いた思いの深層を読み取り、私たち世代が2020年大会に抱く期待やビジョンを明確にしようとした。また、実現されなかったザハ氏の新国立競技場のデザインとそれを建設することでどのような問題が生じるのかをめぐり、旧国立競技場や代々木体育館の建築上の特徴について明治大学の南後由和先生に説明していただいた。東海大学の田中伸彦先生からは明治神宮外苑の特殊な都市、造園計画についてお話しいただいた。「オリンピック—東京からTOKYOへ—」では1964年東京オリンピックを振り返り、招致委員会、東京都がどのように開催を計画しているかについて話を聞きながら、学生から「こんなオリンピックにしたい」という提案をもらい、若者世代を代表する大学生がTOKYO2020を独自に構想し、実現のための方法や課題、そして自らにできる役割についても広く展望できる授業とした。

## 「オリンピック×学生=レボリューション」にこめられた思い

近代オリンピックの提唱者であるピエール・ド・クーベルタン男爵は若者の教育にスポーツが有効であることを確信し、国際大会を模索して古代ギリシャで行われていたオ

オリンピックを参考に国際オリンピック委員会 (IOC) を組織して、第1回のオリンピックをアテネで開催した。オリンピックやパラリンピックは自国を代表したアスリートが集まって世界最高のパフォーマンスを競い合い、メダルを獲得するスポーツの祭典という印象が強い。しかし、IOCが掲げたオリンピック憲章のなかにあるオリンピズムの説明には「オリンピズムは肉体と意思と精神のすべての資質を高め、バランスよく結合させる生き方の哲学である。スポーツを文化、教育と融合させ、生き方の創造を探求するものである。その生き方は努力する喜び、良い規範であることの教育的価値、社会的な責任、さらに普遍的で根本的な倫理規範の尊重を基盤とする」とある。したがって、クーベルタンはスポーツを通してこころとからだを健全にし、さらには文化・国籍といったさまざまな違いを超え、友情や連帯感、フェアプレーの精神をもって互いを理解し合うことで、平和でよりよい世界の実現に貢献しようとしたのである。現代の学生たちが、このようなオリンピズムを理解して、来たる2020年の東京オリンピック・パラリンピックをより良いものにしようとしたら、どのようなことが考えられるのだろうか。学生の立場で、また柔軟な全く新しい発想でこの大きなメガイベントに学生自身がどのように関わっていけるかを考えたときに、国際交流や自己実現に繋がっていくことを期待して授業のタイトルを「オリンピック×学生＝レボリューション」とした。

## 授業の担当者

授業はゲスト・スピーカーや講師が来校しやすいように、また、日常でスポーツ活動を定期的にも実施していても受講しやすいようにという配慮から春学期の土曜日に行い、3限、4限、5限の集中授業とした。受講人数は23名で新座キャンパスの学生も含まれていた。担当した講師の所属と専門分野は、以下の通りである。

|           |                            |
|-----------|----------------------------|
| コーディネーター  | 沼澤 秀雄 (コミュニティ福祉学部・コーチング)   |
| 兼任講師      | 嵯峨 寿 (筑波大学・企業のスポーツ戦略)      |
| ゲスト・スピーカー | 石井 昌彦 (博報堂・クリエイター)         |
| ゲスト・スピーカー | 後藤 光将 (明治大学・体育史)           |
| ゲスト・スピーカー | 荒牧 亜衣 (筑波大学・オリンピックレガシー)    |
| ゲスト・スピーカー | 安藤佳代子 (コミュニティ福祉学部・障害者スポーツ) |
| ゲスト・スピーカー | 南後 由和 (明治大学・建築 都市論)        |
| ゲスト・スピーカー | 田中 伸彦 (東海大学・森林 造園 観光)      |
| ゲスト・スピーカー | 向山 雅之 (竹中工務店・都市計画)         |

1回目の授業は池袋キャンパスの5号館教室で行われ、授業の流れを説明したのち、コーディネーター、兼任講師、何名かのゲスト・スピーカーによる動機づけレクチャーとして自身の専門領域とオリンピックとの関わりについて話した。

## ベイゾーンとヘリテッジゾーン

オリンピック・パラリンピックのような総合競技大会を開催するためには多くの施設が必要になる。選手、観客のアクセスの効率化やセキュリティ重視のため、それらの施設がいくつかの地区に集積されゾーン形成されることが常である。2020東京では、施設建設費削減のため既存施設の再活用の方針からいくつかの競技施設が変更になったものの、神宮外苑の「ヘリテッジゾーン」、臨海地区の「ベイゾーン」の2つのゾーンが形成されることになる。2回目の授業のねらいは50年後の自分と東京をイメージするという本授業のゴールに接近するために欠くことのできない要素として、神宮外苑や臨海エリアなどの五輪関連施設が集積する場（ゾーン）に注目して、歴史、環境、都市論、ランドスケープなど多角的な切り口でオリンピックという視点から東京を理解することであった。後藤光将ゲスト・スピーカーよりオリンピック招致とスポーツ施設計画について説明があったのち、東海大学観光学部の田中伸彦講師より「明治神宮（内苑・外苑）のレガシー」について、明治大学情報コミュニケーション学部の南後由和講師より、「都市論的視点からみるヘリテッジゾーンとベイゾーンの評価」について講義を受けた。また、日本造園学会の向山雅之講師には「東京オリンピック・パラリンピックをきっかけに東京の都市の未来像を提案するー日本造園学会関東支部学生デザインワークショップの試みー」という演題で学生たちが考えた東京2020のマラソンコースの提案についてのお話があった。その後、3名の講師によるミニシンポジウムが行われた。

## アクティブラーニング

パナソニックは、オリンピック・パラリンピックのワールドワイドパートナー（最高位のオリンピックパートナー）である。現在、有明にある「パナソニックセンター東京」内に、オリンピック・パラリンピック教育を支援する日本初の展示施設「Active Learning Camp」を開設した。オリンピックとパラリンピックについて一人ひとりが考え、行動するアクティブな学びの場として「平和」「相互理解」など8つのテーマを手掛かりに、自らオリンピックとパラリンピックについて学ぶことができる体験型の展示施設となっている。また、福祉分野の展開として、誰もが暮らしやすい安心・安全な社会、しょうがい者・高齢者が介助なしで外出できる社会、訪日外国人・しょうがい者が言語の壁を感じない社会を目指したアクセシビリティについての展示があった。3回目の授業はこの2つの展示を実際にグループになって見学し、2020年の大会をイメージした。

当日は車いすテニスの国際大会が有明テニスの森で行われており、チケットを確保して観戦したが、試合進行が早く一番のお目当てだった国枝慎吾選手の試合が13時過ぎには終了してしまい、国枝選手のプレーを見て車いすテニスの面白さを実感できなかったのが残念であった。

## 公開講演会

ウエルネス研究所主催、全学共通カリキュラム運営センター後援の公開シンポジウムが4回目の授業となった。当初は学生自らがテーマや講師を決めて話を聞き、議論することを目標としたが、講師の調整、会場の許可や確保についてはこちらで決めた上で、学内の広報について受講生全員がポスターを作成し、その中から講師が選考した4点を池袋キャンパスと新座キャンパスに掲示した。テーマは「東京2020に向けたベイゾーンの開発」として、都市開発の観点から現在計画されているベイゾーンの開発や大会後の使い方等について、それぞれの講師の立場からのお話をお聞きした。また、シンポジウム終了後に振り返りの時間を設けて感想を書いてもらった。

日時：2016年6月11日（土曜日）14：00～17：00

場所：立教大学池袋キャンパス

主催：ウエルネス研究所

後援：全学共通カリキュラム運営センター

講師：佐藤 次郎（元東京新聞論説委員）

鈴木恵千代（株式会社乃村工藝社 空間デザイナー）

林 瑞恵（東京都港湾局臨海開発部海上公園課）



学生が作成したポスター

## 学生のプレゼンテーション

最後の5回目の授業は学生のプレゼンテーションであった。前回のシンポジウムを受け、オリンピック・パラリンピックの東京開催によって未来の東京が、未来の日本がどうなるのかについて考えることを目的とした。テーマを「50年後のベイゾーン」として2020年東京オリンピック・パラリンピックを通して計画してみたいアクションプランについて、オリンピックあるいはパラリンピックのムーブメントとバリューについて、スポーツ、社会、環境、都市、経済のいずれかについて関連させて発表した。一人につき8分の発表で質疑応答の時間を設けた。以下は評価の高かった発表の要旨である。

## ベイゾーンで実現する“東京五輪公園”

経済学部経済政策学科4年

東京2020を考えるにあたって、お手本となる過去のオリンピックの存在が必要であるとする。私はそれを、2012年のロンドン五輪としたい。その理由は、ロンドンが、東京と同じように既に成熟した都市であること、『世界都市力ランキング』（森記念財団による）など都市の総合力のランキングで1位を獲得していることから、東京が学ぶべき教訓が多くあると感じるからだ。特に2012年の五輪をきっかけに現在も継続中の東ロンドン地域の再開発計画は、その土地の条件などからしても東京のベイゾーンと類似している点が多くある。

そこで私は、東ロンドンの「オリンピックパーク」を発想の起点とし、現在と未来の日本を見つめながら「観光」「居住」「防災」「交通」の4つの軸を掲げて、新たな形での「五輪公園」を具体的に提案したい。

## UNIVERSAL BAY PARK CITY IN THE FUTURE

観光学部観光学科2年

先日、ベイサイドエリアに行った際、私は新富町駅からPanasonicセンターまで歩き、帰りはPanasonicセンターから豊洲や月島を散策して新富町駅まで歩きました。その時、BAYSIDEエリアが閑散としていて周囲には建物がなく人もいない、まだまだ開発途中の地であることを目で見て感じました。そして授業の中でBAYSIDEエリアは様々な可能性を秘める、東京に残された唯一の開発途上地であり、また歴史的にみると「負のヘリテージゾーン」であることを学び、このBAYSIDEエリアの開発は単なる土地再開発ではなく、スケール、歴史的視点、背景、そして今後の日本の将来の都市の未来像、さらには問題解決の重要要素となる可能性まで秘めた、本当に高領域にわたる最重要開発であることを感じました。私はこの授業で感じた可能性をもとに、想像した未来のベイサイドエリアの未来像をプレゼンテーションしたいと思います。

## 7つのバリューと新しい都市

経営学部国際経営学科2年

それぞれのバリューを最大限に生かせるためにベイゾーンの開発を進める。

1. 卓越；一般の方が使いやすく、全力でスポーツに取り組める環境を作るとともに高齢化社会が進んでいる中、健康で居続ける施設の建設。

2. 友情&敬意・尊重；日本人間だけでなく、国を問わず関わり合うことを可能にする都市開発。
3. 決断&勇気；ハンディキャップを持った人々の精神的支えとなれるようなバリアフリーな都市作り。
4. 平等&鼓舞；しょうがい者と健常者間でのスポーツイベントの開催や、話す機会を作る施設の建設。

私は、語学力と様々な国に行った経験を生かして特に2.を計画に移す手助けができる。

## 終わりに

この授業においてオリンピズムを理解し、パラリンピックの歴史や現状をさまざまな分野の講師から学んだことで、学生の意識が化学反応を起こし、レボリューションに繋がったかどうかはわからない。しかし、必ず3年後にやってくるメガイベントであるオリンピック・パラリンピックを好機として捉えて、自分がどのように関わっていけるのか、自分の将来にどのような影響が出てくるのかを考えるきっかけになったのではないかと思う。本学では東京オリンピック・パラリンピックプロジェクトが立ち上がり、幾つかの企画が考えられているが、全学共通科目のスポーツやオリンピック関連科目からもオリンピックムーブメントが起こってくることを期待している。

ぬまざわ ひでお

# Syllabus

## 授業の目標

## Course Objectives

2020年の東京オリンピック・パラリンピック開催で未来の東京、未来の日本がどうなるのかについて考え、自分のアイデアを発表することを目標とする。

## 授業の内容

## Course Contents

オリンピックのレガシーから見えてくる歴史的視点や、オリンピックの本質理解において欠かせない、オリंपイズムをはじめとする基本的な理念、概念などについて学ぶ。また、学外に出てスポーツイベントやオリンピック関係の展示会視察などのフィールドワークと公開シンポジウムの企画運営を行うことに挑戦する。

## 授業計画

## Course Schedule

1. 4月16日 オリエンテーション この授業の目的
2. 4月16日 オリンピック理解のための基礎的知識 (1)
3. 4月16日 オリンピック理解のための基礎的知識 (2)
4. 5月14日 新国立競技場問題の焦点
5. 5月14日 オリンピック施設—ヘリテイジゾーンとベイゾーン—
6. 5月14日 東京2020のマラソンコース
7. 5月28日 パラリンピックの歴史と意義
8. 5月28日 フィールドワーク—車椅子テニスの試合見学—
9. 5月28日 東京パラリンピックから何が生まれるか
10. 6月11日 公開シンポジウム
11. 6月11日 公開シンポジウム
12. 6月11日 公開シンポジウム振り返り
13. 7月16日 学生プレゼンテーション TOKYO2020
14. 7月16日 学生プレゼンテーション TOKYO2020
15. 7月16日 まとめ